

目的や場面、状況等に応じて読む力を育成する中学校英語科学習指導の在り方（第二年次）

ー概要や要点を捉える「読み方」のよさに気づき、価値付ける活動を通してー

長期研究員 安藤 武志

《研究の要旨》

本研究では、中学校英語科における、目的や場面、状況等に応じて読む力の育成を目指した。第二年次研究では、読む目的を明確にする学習課題を工夫することにより、概要や要点を捉える「読み方」のよさに気づき、価値付ける活動を通して、読解活動の充実を図った。その結果、「読み方」を活用する姿や、生徒自ら第一年次研究の既習事項を取り入れる姿が見られ、目的や場面、状況等に応じて読む力の高まりにつながった。

I 研究の趣旨

中学校学習指導要領解説外国語編「読むこと」領域における育成すべき資質・能力として、必要な情報を読み取ること、概要や要点を捉えることが挙げられている。その際、生徒が目的に応じて、また自分の置かれた状況などから判断して必要な情報を把握したり、どの情報が最も重要であるかを判断したりするなどの学習活動が大切であると述べられている。つまり、生徒が自ら目的や場面、状況等に応じて英文を読む力を育成するための授業改善が求められていると言える。

第一年次研究では、読解活動①から⑤で構成した読解プロセスを取り入れた（図1）。その際、読解方略^{※1}を適宜取り入れながら、読解活動①から③において英文一文ずつの理解、読解活動④と⑤においてまとまりのある英語の文章の理解を促した。読解活動①から③の過程に重点を置くことで、自力で英文を読もうとする基盤が整い、必要な情報を読み取れる生徒が増加した。一方で、教師が多くの読解方略を与えたため、生徒が読解方略を使用することが目的となり、読む目的を明確にもつことができなかった。また、読解活動④と⑤の過程で、生徒が自らまとまりのある英語の文章の概要や要点を捉えることができず、その充実を図ることができなかった。

そこで、第二年次研究では、読解活動④と⑤に重点を置き、概要や要点を捉えることができるようにしたいと考えた。そして、第二年次研究における目的や場面、状況等に応じて読む力を「情報を整理するために必要な情報を読み取り、概要や要点を捉える力」と定義し、その力の育成を目指すこととした。また、生徒が読む目的を明確にして英語の文章が読めるよう学習課題の設定を工夫する。その際、教師が読解方略を与えるのではなく、生徒が概要や要点を捉える「読み方」^{※2}に気づき、それを価値付け、活用できるようにしていきたい。読解活動の際は、生徒が必要に応じて読解活動①から③や既習の読解方略を取り入れることができるようにする。

- ※1 「読む前に図や絵、周りの情報を見て、英文の内容を予想する」、「主語・動詞に注意を向けて読む」など、英文を読むための足掛かり
※2 本研究では、生徒が気付いた学習課題を解決するための英文を読むコツと捉える。

II 研究の概要

1 研究仮説

中学校英語科「読むこと」領域において、以下の手立てを講じれば、目的や場面、状況等に応じて読む力を育成することができるであろう（図1）。

- 【手立て1】目的を明確にして読むための学習課題の設定の工夫
【手立て2】読み取った必要な情報や考えを共有し、「読み方」に気付く活動
【手立て3】「読み方」を生徒自身で価値付ける振り返りの工夫

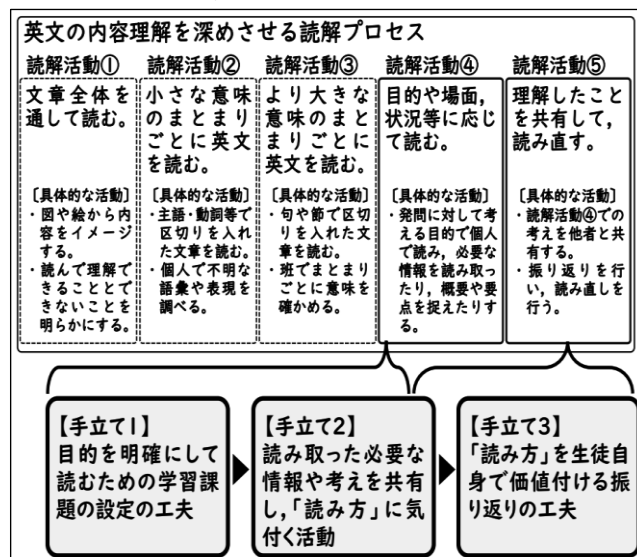


図1 読解活動と手立ての関係

2 研究の内容

(1) 【手立て1】目的を明確にして読むための学習課題の設定の工夫

概要や要点を捉える「読み方」につながるよう、読む目的に合った情報を選択して、表現するような学習課題を設定する。

例えば「概要を捉える」学習においては、挿絵の選択・並べ替えを行うことを学習課題とし、特定の部分にとらわれることなく、書き手が述べている大まかな内容を捉えることができるようにする。

また、「要点を捉える」学習では、書き手の意見に対する自分の考えとその理由を問うことを学習課題とし、文章全体を読み通した上で複数の情報を取り出し、書き手が最も伝えたいことや、どの情報がその説明の中で最も重要であるかを判断できるようにする。

(2)【手立て2】読み取った必要な情報や考えを共有し、「読み方」に気付く活動

まず、生徒が英語の文章から必要な情報や考えを読み取る際、その根拠となる箇所に線を引かせる。次に、「なぜそこに線を引いたのか」という視点で対話活動を行う。そのような共有の場を設けることで、文章中の根拠となる箇所を基に、キーワードやキーセンテンス等を拾いながら全体の内容をまとめたり、各段落の主な内容を捉えたりする。このことを通して、生徒が概要や要点を捉える「読み方」に気付くことができるようにする。

(3)【手立て3】「読み方」を生徒自身で価値付ける振り返りの工夫

別の英語の文章を読む際、生徒が気付いた「読み方」を活用して「読み方」のよさを実感する場面や、複数の「読み方」を比較してそれぞれのよさを再認識する場面を設ける。そうすることで、生徒が自分の「読み方」を振り返り、価値付け、活用しやすい状況をつくるようにする。

3 研究の実際

対象生徒 第3学年53名（2学級）

授業実践Ⅰ Unit3 Animals on the Red List（11時間）

授業実践Ⅱ Unit4 Be Prepared and Work Together（10時間）

本稿では、授業実践Ⅱについて述べる。ここで扱う題材は、「震災時の外国人支援」になっており、四つのパートで構成されている。パート1と2では、話したり書いたりする活動を中心に行った。その上で、パート3と4において、本研究の手立てを講じた。パート3は、「地震で困った外国人の体験談について紹介している」内容である。ここでは、「体験談」で起きた出来事が時系列に沿って書かれているため、「概要を捉える」学習に生徒が取り組みやすいと考えた。パート4は、「あるテレビ番組のリポーターが災害時の外国人支援の取り組みについて紹介している」内容である。ここでは、「災害に備える必要性」という書き手の意見が英語の文章の中で繰り返し述べられているため、「要点を捉える」学習に生徒が取り組みやすいと考えた。

(1)【手立て1】について

【手立て1】は、「概要を捉える」学習と「要点を捉える」学習を行う際に講じた（図2）。

パート	【手立て1】学習課題の設定の工夫	【手立て2】の場面で気付かせたい「読み方」
3	挿絵の選択・並べ替え 書き手が述べている大まかな内容や話のあらすじを捉えるようにする。	概要を捉える「読み方」
4	書き手の意見に対する賛否とその理由を問う 自身の考えの根拠を探しながら書き手の意見を捉えるようにする。	要点を捉える「読み方」

図2 パート3と4における学習課題の設定の工夫

パート3では、生徒が「概要を捉える」学習に取り組めるよう、英語の文章に適する挿絵の選択・並べ替えを行うことを学習課題とした。挿絵は、本文の内容に関わるものと関わらないものを各段落に2、3枚用意した。本文の内容に関わる挿絵と関わらない挿絵を選択し並べ替えることで、特定の部分にとらわれることなく、書き手が述べている大まかな内容を捉えることができるようにしたいと考えた。そうすることで、【手立て2】の場面で、概要を捉える「読み方」に気付くことができるようにする。これらを踏まえて、実際の授業では、次のように学習課題を示した。

英語が苦手な人に体験談を分かりやすく伝えるために、絵を加えよう。

生徒は、学習端末にある挿絵の選択・並べ替えを行いながら、英文を読み進めた。その際、英語の文章全体を通して読み、理解できない部分を生徒同士で解決しようとする姿が見られた。これは自主的に読解活動①を取り入れた姿である。また、意味のまとまりごとに区切られた英文を基にして文章を読む姿も見られた。これは自主的に読解活動②と③を取り入れた姿である。このように、生徒は既習の読解方略である「読む前に図や絵、周りの情報を見て、英文の内容を予想する」や「主語・動詞に注意を向けて読む」などを積極的に活用していた。さらに、生徒は英文の内容に関わる挿絵と関わらない挿絵や、選択した挿絵の順番を生徒同士で確かめ合いながら、何度も英文と向き合っていた。挿絵の選択・並べ替えを学習課題としたことで、英語の文章から概要を捉えようとする姿が見られた。

パート4では、生徒が「要点を捉える」学習に取り組めるよう、書き手の意見に対する賛否とその理由を問うことを学習課題とした。書き手の意見に対する賛否とその理由を問うことで、英語の文章から考えの根拠を探し、複数の情報から、どの情報がその説明の中で最も重要なのかを判断できるようにしたいと考えた。そうすることで、【手立て2】の場面で、要点を捉える「読み方」に気

付くことができるようにする。これらを踏まえて、実際の授業では、次のように学習課題を示した。

Do you agree with this reporter's idea? Or disagree? And why? (リポーターの意見に賛成か反対か。その理由は何か)

生徒は、リポーターの意見とは何であるか疑問をもち、その意見を探するために英文を読み始めた。また、リポーターの意見に対する賛否とその理由を考えるために、何度も英文と向き合う姿が見られた。ここでも生徒は、読解活動①から③や既習の読解方略を踏まえて英文を理解しようとしていた。このような学習課題の設定の工夫により、英語の文章の要点を捉えるため、工夫する生徒の姿が見られた。

(2)【手立て2】について

「概要を捉える」学習の際には、生徒は選んだ挿絵の根拠となる英文に線を引いた。「なぜそこに線を引いたのか」と発問し、その視点で生徒同士、生徒と教師で対話活動を行った。生徒は、『After the terrible shaking』とあったので、その後の出来事に注目した、「いつ出来事が起きたのか」順番を意識したから」と出来事を表すキーワードや時間を表す表現、さらにはそれらが出てくる順序などに注目した。また、「段落の始まりの数文から震災に関係する話題だと思ったから」と話題が書かれている文に注目した生徒も見られた。

このような共有の場を設けることで、出来事やその前後にある時系列を表す接続詞などを手掛かりに、各段落の主な内容を捉えることができた。このことを通して、パート3の文章では、概要を捉える「読み方」として、各段落の始まりの部分から話題をつかみ、いつ何が起きたのかに注目して読むことに気付くことができた。

「要点を捉える」学習の際には、生徒は要点となる部分に線を引いたり、自分の考えの根拠となる部分に線を引いたりした。「なぜそこに線を引いたのか」と発問し、その視点で生徒同士、生徒と教師で対話活動を行った。生徒は、『準備の必要性』について繰り返し述べているから」と繰り返し使われているキーワードを挙げた。さらには、『It is necessary for us to be prepared to help them.』の文で『準備することが大切だ』と言っているから、『Everyone should be prepared.』と『should』を使って『準備すべき』と書いてあるから」と主張を表す表現やキーセンテンスに注目した。

このような共有の場を設けることで、繰り返し使われているキーワードや主張を表す表現のあるキーセンテンスを手掛かりに、各段落の主な内容を捉え、要点を捉えることができた。このことを通して、パート4の文章で

は、要点を捉える「読み方」として、主張を表す表現や繰り返されているキーワードに注目して読んだり、結論のある段落から筆者の主張を表す文に注目して読んだりすることに気付くことができた。一方で、教師がキーワードやキーセンテンスを手掛かりにした要点を捉える「読み方」に焦点を置いたため、段落同士のつながりに注目していた生徒の発言を全体で共有することができなかった。そのため、文章の構成や展開を踏まえた要点を捉える「読み方」への気付きを生徒に促すことができなかった。

(3)【手立て3】について

【手立て3】は、「概要を捉える」学習と「要点を捉える」学習を行う際に講じた(図3)。

まず、生徒が気付いた「読み方」を、別の英語の文章を読む際にも活用する場面を設けた。「概要を捉える」学習で

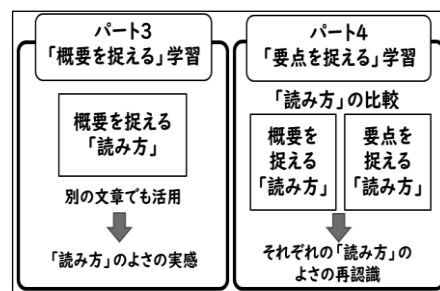


図3 【手立て3】のイメージ

は、生徒が別の英語の文章を読む際にも、挿絵の選択・並べ替える活動を行うことで、概要を捉える「読み方」を活用できるようにした。

次に、「要点を捉える」学習では、概要を捉える「読み方」と要点を捉える「読み方」を比較する場面を設けた。生徒は、「読み方」が、どのようなことを読み取る際に役立つかを振り返った。生徒は、「あらすじを知りたいときには、出来事の順番を意識するとよい」、「今回の活動は筆者の主張を読み取る活動なので、結論のある段落から筆者の主張を表す表現に注目する『読み方』が役に立った」など、それぞれの「読み方」について振り返った。

このように、生徒は、キーワードやキーセンテンスを手掛かりにした概要や要点を捉える「読み方」のよさに気付く、価値付けることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 検証と分析

(1) 事前・事後テストによる目的や場面、状況等に応じて読む力の検証と分析

① 内容と方法

「情報を整理するために必要な情報を読み取り、概要や要点を捉える力」を検証するために、7月の授業実践Ⅰの前と9月の授業実践Ⅱの後にテストを行った。事前・事後テストは、令和5年度全国学力・学習状況調査を参

するために、生徒
が読み取った必要

図4 事前・事後テストの出題形式

事前テストと事後テストの条件をそろえるために、テストの形式を統一し、その難易度は実用英語技能検定4級と同等のものとした。ただし、英文の内容は異なるものとし、単元の題材に関連しないものとした。テストは20分間で実施し、辞書や教科書の使用は認めなかった。

事前・事後テストの正答率(%) (n=52)			
設問	事前(7月)	事後(9月)	有意差
概要	59.6	84.6	有(p=.0018)
要点	32.7	67.3	有(p=.0012)

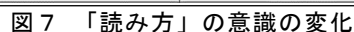
事後テストでは、「概要を捉える」設問と「要点を捉える」設問の両方で、事前テストから有意に正答率が向上した（図5）。（ $p < .05$ ）

事後テストでは、「要点を捉える」設問においても、「要点を捉える」設問においても、大幅な向上が見られたが、全体の正答率を見た際に、「要点を捉える」ことに関しては、さらに向上の余地があると考えた。そこで、事後テストの「要点を捉える」設問における解答類型を整理し、生徒の誤答状況を分析した（図6）。

図6 「要点を捉える」設問の解答類型

(2) 意識調査の分析

本研究を通して、生徒の「読み方」に関する意識の変化を測るため、7月の授業実践Ⅰの前と9月の授業実践Ⅱの後に意識調査を行った。「英語の文章を読むとき、工夫していることはあるか」という質問に対して、自由記述させ、その全記述についてテキストマイニングを用いて分析した(図7)。



実践前の調査においては、概要や要点に関する記述はあまり見られなかった。しかし、実践後の調査においては、「段落」、「あらすじ」、「大まか」、「筆者」、「主張」という記述があり、概要や要点を捉える「読み方」に關係する記述が見られた。生徒が「読み方」に気付き、そのよさを価値付けたことで、「読み方」を活用しやすくなったのではないかと考える。その結果、目的や場面、状況等に応じて読む意識の高まりが見られるようになったと推察する。

(1) 研究の成果

学習課題の設

目的を明確にした読解活動④と⑤の充実が図られ、目的や場面、状況等に応じて読む力の高まりが見られた。「概要や要点を捉える」学習の際には、生徒が「読み方」を活用する姿や、自ら読解活動①から③や既習の読解方略を取り入れる姿も確認できた。

(2) 今後の課題

今回の研究では、キーワード等を手掛かりにした要点を捉える「読み方」とどまった。今後は、文章の構成や展開を踏まえた要点を捉える「読み方」にも気付かせたい。そのため、語句と語句の関連や接続表現などを手掛かりに、各段落内の構成や段落間の関係を正確に把握できるようにする。このことで、生徒は複数の「読み方」を活用できるようになり、目的や場面、状況等に応じて読む力のさらなる高まりにつながると考える。